

蘇軾と羽扇綸巾

中原健 二

はじめに

宋を代表する文人蘇軾の傑作に「赤壁懷古」と題する「念奴嬌」詞がある。これは同時期の作である「赤壁賦」「後赤壁賦」と並んで、赤壁といえれば必ず想起されるほどに後世に大きな影響を与えた作品である。その「念奴嬌」のなかに、

遙想公瑾當年

遙かに想う 公瑾 當年にして

小喬初嫁了

小喬 初めて嫁し了り

雄姿英發

雄姿 英發なりしを

羽扇綸巾

羽扇綸巾にて

談笑閒 強虜灰飛煙滅 談笑の間に 強虜は灰と飛び煙と滅せり

という一節がある。①この「羽扇綸巾」が誰を指しているかについては周瑜説と諸葛亮説があつて、しばらく論争が續いたこともある。しかし、現在では周瑜説に落ち着いたようで、筆者は前稿「羽扇綸巾のひと―周瑜と諸葛亮」において、蘇軾の「羽扇綸巾」が時代の變遷につれて、とくに小説『三國志演義』の影響を受け、諸葛亮を指すと理解されるようになって行く過程を素描してみた。②本稿では少し角度を變え、蘇軾および彼以前の「羽扇綸巾」、さらにはこれに關連することがらについて考えてみたい。

一

「念奴嬌」が作られたのは、元豐年間、黃州流謫の時代である。では、それ以前の詩詞や散文において、蘇軾が「羽扇」と「綸巾」を對にして用いたことがあつたかという点、實はない。ただ、それぞれ單獨の用例があるので、まず「綸巾」の用例から見よう。③

(1) 更著・綸巾・披鶴氅 更に綸巾を著け鶴氅を披はり  
他年應作畫圖詩 他年 應に畫圖を作りて誇るべし

(「次韻周長官壽星院同錢魯少卿」『詩集』五一二頁、熙寧六年(一〇七三) 杭州作)

(2) 回首舊遊眞是夢 回首すれば 舊遊は眞に是れ夢なり

一簪華髮岸綸巾 一簪の華髮 綸巾を岸あぐ

(「臺頭寺步月得人字」『詩集』九二〇頁、元豐二年(一〇七九) 徐州作)

(3) 綸巾鶴氅、驚笑吳婦(綸巾鶴氅、吳婦を驚笑せしむ)

(「祭柳子玉文」『文集』一九三八頁) ④

「綸巾」とは、青色の絹絲で作られた頭巾で、貴族や隱者、文人の着用するものとされるが、「綸巾」にまつわる故事を傳えられる人物で最もよく知られるのは晉の謝安の弟、謝萬である。『晉書』の傳には、「簡文帝作相、聞其名、召爲撫軍從事中郎、萬著白綸巾、鶴氅裘、履版而前、既見、與帝共談移日(簡文帝 相と作り、其の名を聞き、召して撫軍從事中郎と爲す、萬は白綸巾、鶴氅裘を著け、版を履けんきて前すむ、既に見ゆるや、帝と共に談じて日を移せり)」とある。謝萬の着けていたのは、「白綸巾」と「鶴氅裘(羽毛の外套)」で、以後「綸巾」はしばしば「鶴氅」と對になつて用いられることになる。蘇軾の(1)と(3)はまさにそうである。そして、もちろん、三例ともに周瑜や諸葛亮との直接的關連は見出せない。どうやら「綸巾」は周瑜や諸葛亮とすぐには結びつかないようである。

次に「羽扇」であるが、蘇軾の詩においては次の四例を見出せる。

(4) 書生古亦有戰陣 書生 古にも亦た戰陣有り

葛巾羽扇揮三軍 葛巾 羽扇にて三軍を揮ませり

(「健爲王氏書樓」『詩集』七頁、嘉祐四年(一〇五九) 健爲作)

(5) 落日岸葛巾 落日 葛巾を岸げ

晚風吹羽扇 晚風 羽扇を吹く

(「自淨土寺步至功臣寺」『詩集』三四五頁、熙寧五年(一〇七二) 杭州作)

(6) 陣雲冷壓黃茅瘴 陣雲 冷たく壓す 黃茅瘴

羽扇斜揮白葛巾 羽扇 斜めに揮う 白葛巾

(「聞喬太博換左藏知欽州以詩招飲」『詩集』六八二頁、熙寧九年(一〇七六) 密州作)

(7) 葛巾羽扇紅塵靜 葛巾 羽扇 紅塵靜まり

投壺雅歌清燕開 投壺 雅歌 清燕開く

(「送將官梁左藏赴莫州」『詩集』八四六頁、元豐元年(一〇七八) 徐州作)

この四例で注目されるのは、「羽扇」はすべて「葛巾(葛布で作った頭巾)」と對になって用いられていることである。つまり「羽扇綸巾」ではなく、「羽扇葛巾」である。となれば、例の裴啓の『語林』に見える故事がすぐさま想起される。

諸葛武侯與司馬宣王在渭濱、將戰、武侯乘素輿、葛巾白羽扇、指麾三軍、三軍皆隨其進止

(諸葛武侯は司馬宣王と渭濱に在り、將に戰わんとし、武侯は素輿に乗り、葛巾と白羽扇にて、三軍を指麾す、三軍は皆其の進止に隨う) ⑤

諸葛亮が司馬懿と會戦したときに「葛巾」を着け、「羽扇」を手にして指揮をしたというものである。「羽扇綸巾」ではなく「羽扇葛巾」であるならば、それはこの『語林』の記事を踏まえていると考えてよいだろう。實際、(4)は直接諸葛亮を引き合いに出したものであり、(6)は、太常博士から武官の左藏庫副使に換えられて知欽州となった喬紋の着任後のさまを想像してうたったもので、これも『語林』を踏まえている。また、(7)も、(6)の喬紋と同様に武官の梁交の知莫州着任後のさまを想像したものであって、やはり『語林』に基づく。(5)のみは蘇軾自身のくつろいだ出で立ちをいい、直接的に諸葛亮を想像させるものではないが、「羽扇」と「葛巾」の併用はやはり諸葛亮のイメージを伴っている。つまり、蘇軾において「羽扇」は常に「葛巾」と結びつき、「羽扇葛巾」といえば諸葛亮を指していたのである。(6)

「念奴嬌」以前の蘇軾の用例を見ると、「羽扇」や「綸巾」は周瑜と必然的な結びつきがあるわけではなかったと考えられる。では、蘇軾以前はどうであろうか。「羽扇綸巾」あるいは「羽扇葛巾」と對にした例があるだろうか。また、「綸巾」と「葛巾」はどのような使われ方をしているのだろうか。すべての文獻の調査は當然ながら筆者の力の及ぶところではないので、漢魏から蘇軾に至るまでの詩について探ってみることにしたい。

唐代以前は、實は「綸巾」「葛巾」ともに用例がほとんどない。管見に入ったのは、庾信の「示封中錄二首之二」の「葛巾久乖角、菊逕簡經過」のみである。したがって、もちろん「羽扇」と對になった例は見當たらない。時代が下って唐代に至ると、「綸巾」「葛巾」ともにかなりの数の用例を見出せるようになる。いくつか例を挙げておこう。(3)

(8) 曉垂朱綬帶 曉には垂らす 朱綬帶

晚著白綸巾 晚には著す 白綸巾

出去爲朝客 出で去りて朝客と爲るも

歸來是野人 歸り來れば是れ野人

(白居易「訪陳二」)

(9) 玉珮金章紫花綬 玉珮 金章 紫花綬

紵衫藤帶白綸巾 紵衫 藤帶 白綸巾

晨興拜表稱朝士 晨に興き 表を拜して朝士を稱し

晚出遊山作野人 晚に出で 山に遊んで野人と作る

(白居易「拜表回閑遊」)

(10) 白綸巾下髮如絲 白綸巾の下 髮は絲の如く

靜倚楓根坐釣磯 靜かに楓根に倚つて釣磯に坐す

中婦桑村挑葉去 中婦は桑村に葉を挑去り

小兒沙市買蓑歸 小兒は沙市に蓑を買い歸る

(皮日休「西塞山泊漁家」)

(11) 陶令日日醉 陶令 日日に酔い

不知五柳春 五柳の春を知らず

素琴本無弦 素琴 本より弦無く

澆酒用葛巾 澆酒 葛巾を用う

(李白「戲贈鄭深陽」)

(12) 不厭晴林下 厭わず 晴林の下

微風度葛巾 微風 葛巾を度る

寧唯北窗月 寧んぞ唯だ北窗の月のみ

自謂上皇人 自ら上皇の人と謂わん

(錢起「衡門春夜」)

(13) 一片白葛巾 一片の白葛巾

潛夫自能結 潛夫 自ら能く結ぶ

籬邊折枯蒿 籬邊に枯蒿を折り

聊用簪華髮 聊か用て華髮に簪さん

(劉言史「葛巾歌」)

「綸巾」「葛巾」ともに唐詩ではそれほど珍しい語ではなくなっているとは言えるが、「羽扇」と併用された例はやはり見出し得ず、ここに挙げた例もすべて單獨で使用されたものである。(3)では、次いで、宋代に入ってから蘇軾まではどうかという、これも唐詩と同様のようである。つまり、單獨の用例はあるが、「羽扇」と並べた例は見當たらぬ。いま、ひとつずつ例を挙げておく。

(14) 重到田園草木零 重ねて田園に到れば草木零れ

鬢毛蕭颯白綸巾 鬢毛 蕭颯たり 白綸巾

謾誇孺子能分肉 謾りに誇る 孺子の能く肉を分かつを

堪笑書生尙負薪 笑うに堪えたり 書生の尙お薪を負う

……

東籬已有黃金蕊 東籬 已に黄金の蕊有り

只缺白衣送酒人 只だ缺く 白衣の酒を送る人

(陳舜俞「晚秋田間」)

(15) 看雨拈藤杖 雨を見て藤杖を拈き

迎風卸葛巾 風を迎えて葛巾を卸す

我來懷愧甚 我來りて愧を懷くこと甚し

衣上有紅塵 衣の上に紅塵有ればなり

(文同「書隱者壁」)

ただし、ここで留意しておきたいのは、「綸巾」と「葛巾」の持つイメージには共通したものであるということである。両者は本来別物であったはずである。しかし、どちらも、士人の公的生活における衣冠といった正装とは異なり、私的生活におけるくつろいだ服装という点では同じなのである。(8)、(9)、(12)、(13)の例はそのことを示している。そして、さらにこれにとどまらず、両者ともに隱者の服装へと繋がってゆくことは、(10)、(14)、(15)の例を見れば首肯されるはずである。とくに「葛巾」については、(11)で明白であるように、有名な陶淵明の「葛巾漉酒」の故事(9)を背景に持つことに留意すべきであろう。要するに、「綸巾」と「葛巾」は常に明確に區別されていたというわけでもなさそうである。であるならば、蘇軾が「念奴嬌」でうたった「羽扇綸巾」が、元來「羽扇葛巾」の故事を持つ諸葛亮に引きつけて理解されるのも、あながち理由のないことではなかつたのである。

以上、これまで述べてきたところによれば、周瑜を「羽扇綸巾」で形容するのは蘇軾の「念奴嬌」が最初だったらしい、ということになる。周瑜の「羽扇綸巾」は、實は蘇軾の獨創であつたと考えられるのである。

蘇軾が周瑜に言及することは諸葛亮に比べれば少ない。周瑜を直接題材にしたものとしては、すでに注(7)で挙げた「周瑜雅量」(『文集』二〇二〇頁)と「記李邦直言周瑜」(『文集』二〇七七頁)があるが、いずれも短いものである。一方、諸葛亮については言及も多く、「諸葛亮論」(『文集』一一二頁)なる論文も書かれている。周瑜は諸葛亮に比べてやや軽い扱いを受けているといえるが、諸葛亮の歴史上の存在の大きさから言つて、怪しむに足りないことだろう。

さて、その多くはない周瑜への言及は、黄州時代が半数近くを占める。いま、それを挙げると以下の通りである。

(16) 西望夏口、東望武昌、山川相繆、鬱乎蒼蒼、此非孟德之困於周郎者乎(西のかた夏口を望み、東のかた武昌を望めば、山川 相繆まじまじわりて、鬱乎として蒼蒼たり、此れ孟徳の周郎に困しめられし者に非ざらんや)

(「赤壁賦」『文集』五頁)

(17) 黄州守居之數百步爲赤壁、或言卽周瑜破曹公處、不知果是否(黄州の守居の數百步を赤壁と爲す、或ひと言う、即ち周瑜の曹公を破りし處なりと、果して是なるや否やを知らず)

(「記赤壁」『文集』二二五五頁)

(18) 今日李委秀才來相別、因以小舟載酒飲赤壁下、李善吹笛、酒酣作數弄、……坐念孟徳公瑾、如昨日耳(今日李委秀才來りて相別る、因りて小舟を以て酒を載せて赤壁の下に飲む、李は善く笛を吹き、酒酣にして數弄を作す、……坐るに孟徳公瑾を念いて、昨日の如きのみ)

(「與范子豐八首之七」『文集』一四五二頁)

(19) 與君飲酒細論文 君と酒を飲みて細く文を論ずれば

酒酣訪古江之濱 酒酣にして古を訪う 江の濱

仲謀公瑾不須弔 仲謀 公瑾 弔らうを須いず

一酌波神英烈君 一たび酌せん 波神英烈の君に

(「王齊萬秀才寓居武昌縣劉郎洲、正與伍洲相對、伍子胥奔吳所從渡江也」『詩集』一〇三八頁)

これはやはり、黄州流謫という境遇と赤壁の存在が大きな刺激となつたからに相違あるまい。そして、蘇軾はその詞

「念奴嬌」で「赤壁」の戦いを「懷古」して、「遙想公瑾當年、小喬初嫁了、雄姿英發、羽扇綸巾、談笑閒、强虜灰飛煙滅」とうたったのだが、周瑜に「羽扇綸巾」を結びつける發想はどこから来たのであろうか。先に「綸巾」と「葛巾」は明確に區別されていたわけではないことを述べた。しかし、兩者が本来もつイメージは異なっている。「綸巾」は、謝萬の故事が最もよく知られていることからわかるように、やはり六朝の貴族の被つたものとしてのイメージがより強いし、一方「葛巾」は、書生（學問の徒）や隱者の被るものとしてのイメージがより強い。「葛巾」が隱者のイメージをより強く與えるのは、すでに擧げた陶淵明の故事ばかりがその例ではなく、たとえば、『晉書』隱逸傳の郭文の傳に「恒著鹿裘葛巾、不飲酒食肉、區種菽麥、採竹葉木實、買鹽以自供（恒に鹿裘葛巾を著け、飲酒食肉せず、菽麥を區種し、竹葉木實を採り、鹽を買って以て自供す）」、『南史』隱逸傳の陶弘景の傳に「後簡文臨南徐州、欽其風素、召至後堂、以葛巾進見、與談論數日而去、簡文甚敬異之（後に簡文南徐州に臨み、其の風素を欽い、召して後堂に至らしむ、葛巾を以て進見し、與に談論すること數日にして去れり、簡文甚だ敬いてこれを異とす）」などであるのを擧げることができ。また、書生との繋がりについては、晉の張華『博物志』卷九の「漢中興、士人皆冠葛巾、建安中、魏武帝造白帢、於是遂廢、唯二學書生猶著也（漢の中興するや、士人は皆葛巾を冠る、建安中、魏の武帝白帢を造る、是に於て遂に廢る、唯だ二學（國學と太學：筆者）の書生のみ猶お著くるなり）」という記事が参考になるが、『太平御覽』卷二二六「國子祭酒」の項に引く「齊職儀」に「晉令、博士祭酒、掌國子學、而國子生師事祭酒執經、葛巾單衣、終身致敬（晉令に、博士祭酒は、國子學を掌り、國子生は祭酒執經に師事し、葛巾單衣にして、終身敬を致す）」というのも、『博物志』の記事につながる。「綸巾」と「葛巾」本来のイメージから見れば、「綸巾」は周瑜に、「葛巾」は諸葛亮に相應しい、と言えそうである。（一）

そして、さらに言えば、「念奴嬌」の「羽扇綸巾」が直接的に發想を借りたのは、おそらく李白の「永王東巡歌十一首」其二ではなからうか。

三川北虜亂如麻 三川の北虜 亂れて麻の如く

四海南奔似永嘉 四海 南に奔つて 永嘉に似たり

但用東山謝安石 但だ東山の謝安石を用うれば

爲君談笑靜胡沙 君が爲に談笑して胡沙を靜めん

この詩の背景は改めて説くまでもあるまい。注目したいのは、「ただあの謝安石のような人物を用いさえすれば、わが君のために談笑しながらえびすの砂塵を鎮めてしまふだろう」という後半二句である。「羽扇」や「綸巾」という言葉は全く出てこないのはあるが、この二句は「念奴嬌」の前掲部分、とくに「談笑閒 強虜灰飛煙滅」の句に通ずるものがある。また、謝安石とは言うまでもなく晉の謝安のことで、「綸巾」の故事で有名な謝萬の兄であった。謝玄らが苻堅の大軍を破つたとの報を読み終えるや牀の上に放り出し、客が問うと「小兒の輩 遂に已に賊を破れり」と悠然と答えた話は有名である。「綸巾」はどちらかと言えば謝安や謝萬のような六朝貴族と結びつくことは先に觸れたが、蘇軾の門弟である晁補之にも次のような例がある。

(20) 想東山・謝守 想う 東山の謝守

綸巾・羽扇 綸巾羽扇にして

高歌下 青天半 高歌は下る 青天の半ば

(「水龍吟 寄留守無媿丈」) <sup>123</sup>

(21) 雲端紅粉拊雕欄 雲端の紅粉 雕欄を拊ち

謝守綸巾語笑閒 謝守 綸巾語笑の閒

(「次韻李秬祥符軒」)

「謝守」とは言うまでもなく謝安である。もちろん借りて(20)では應天府留守の趙無媿を、(21)では知信州の李秬を指す。この二例ともに明らかに謝安と「綸巾」「羽扇」を結びつけている。「綸巾」は六朝貴族の服装として意識されていたのである。<sup>123</sup>「念奴嬌」の「羽扇綸巾」が周瑜と諸葛亮のどちらに似つかわしいか、おのずと知れるであろう。名家の御曹司で赤壁の英雄、かつ音楽にも精通し、呉の人々から「周郎」と呼ばれた周瑜、その出で立ちは「羽扇綸巾」こそ相應しかつたのである。

おわりに

古く「羽扇葛巾」の出で立ちで戦場に臨んだのは諸葛亮であった。ところが、蘇軾の「念奴嬌」に至って、周瑜が「羽扇綸巾」の姿で颯爽と登場した。「赤壁賦」との相乗効果もあつてか、その影響は極めて大きかった。この邊りの経緯は前稿で述べたので繰り返さないが、たとえば、南宋の劉宰（一一六六—一二三九）の「賀趙守善湘到任」（『漫塘集』卷十五）に、「羽扇綸巾、周公瑾之當赤壁（羽扇綸巾にて、周公瑾の赤壁に當たり）」とあるのは、「念奴嬌」の影響の大きさを十分に窺わせてくれる。<sup>①</sup>「念奴嬌」以後、周瑜は「羽扇綸巾」の出で立ちで曹操の軍を破ることになったのであり、それは蘇軾の天才によるものであつた。しかし、明代に至ると、諸葛亮は周瑜から「羽扇綸巾」の出で立ちを奪い取つてしまふ。<sup>②</sup>その誘因となるのが、みずからその流行を傳えた<sup>③</sup>三國志の語り物、すなわちのちに小説『三國志演義』へと成長する物語であることを、蘇軾は豫見し得たであらうか。

（注）

- (1) 「念奴嬌」の全文は煩を避けて引用しない。
- (2) 『興膳教授退官記念 中國文學論集』（二〇〇〇年三月、汲古書院）。
- (3) 蘇軾の作品の引用は、『蘇軾詩集』（中華書局、『詩集』と略稱）、『蘇軾文集』（中華書局、『文集』と略稱）、『全宋詞』に據る。詩の制作年は特に断らない限り『蘇軾詩集』の編年に據る。
- (4) 清、查慎行「補註東坡先生編年詩」卷十一「送柳子玉赴靈隱」の注に、「子玉之歿、當在丙辰丁巳間」という。丙辰は一〇七六（熙寧九）年である。
- (5) 『太平御覽』卷七〇二「扇」。その他に、同書卷三〇七「鷹兵」、卷七七四「輿」、『藝文類聚』卷六七巾「帽」、『北堂書鈔』卷一一八「攻戰」一一などに見える。
- (6) 蘇軾の「葛巾」の用例は、もうひとつ「周瑜雅量」（『文集』二〇二〇頁）なる散文に見え、

曹公聞周瑜年少有美才、謂可遊說動也。乃密下揚州、遣九江將幹往見瑜。幹有儀容、以才辯見稱、獨步江淮之間。乃布衣葛巾、自託私行、詣瑜

とある。これは『三國志』周瑜傳の注に引かれる『江表傳』に據るものであるが、曹操によつて周瑜説得に向かわされた將幹の出で立ちであり、周瑜とは結びつかない。

- (7) 以下、蘇軾以外の作品の引用は、特に断らない限り、『先秦漢魏晉南北朝詩』、『全唐詩』、『全宋詩』、『全宋詞』に據る。
- (8) 『全唐詩』には、唐末の傳説的道士である呂巖の詞が收められ、その「雨中花」に、「嶽陽樓上、綸巾羽扇、誰識天人」とある。しかし、呂巖の一連の詞は後人の偽作である可能性が高く、存疑としておく。
- (9) 『晉書』陶潛傳に見える。
- (10) その他の例を擧げておく。
- (a) 但試周郎看鬢否、曲音小誤已回顧（「次韻王都尉偶得耳疾」）『詩集』一五五〇頁、元祐二年作
- (b) 知音如周郎、議論亦英發（「送歐陽推官赴華州監酒」）『詩集』一八〇六頁、元祐六年作
- (c) 欲求公瑾一困米、試滿莊生五石樽（「惠守詹君見和復次韻」）『詩集』二〇七八頁、紹聖元年作
- (d) 酒酣魯叟頻相憶、曲罷周郎尚不知（「法惠小飲以詩索周開祖所作」）『詩集』二六〇七頁、
- (a) (b) (d) は「曲有誤、周郎顧」といわれた有名な故事、(c) は魯肅が二つある米藏のうちの一つを、氣前よく周瑜に與えて糧秣とさせたという故事、に基づく。『三國志』の周瑜傳および魯肅傳に見える。
- (11) 辭書などで、「綸巾」は一名「諸葛巾」という、と説明をすることがあるようだが、「諸葛巾」という語自體の古い用例は見つからない。これはおそらく、明の『三才圖繪』の「諸葛巾」の説明に「此名綸巾（綸、音關）、諸葛武侯嘗服綸巾、執羽扇、指揮軍事、正此巾也、因其人而名之、今鮮服者（此れを綸巾（綸、音は關なり）と名づく、諸葛武侯嘗て綸巾を服し、羽扇を執り、軍事を指揮す、正に此の巾なり、其の人に因つてこれに名づく、今は服する者は鮮し）」というのに據つてゐるのである。「綸巾」と諸葛亮の結びつきが一般的になるのは、蘇軾よりずっと後の時代のことである。
- (12) 「丈」はもと「文」に作る。劉乃昌、楊慶存校注『晁氏琴趣外篇・晁叔用詞』（一九九一年、上海古籍出版社）によつて改めた。
- (13) 「水龍吟」は、注(12)の『晁氏琴趣外篇・晁叔用詞』によれば、紹聖三年（一〇九六）の作。「次韻李秬祥符軒」は、監信州鹽酒稅に貶とされていた元符二年（一〇九九）から三年（一一〇〇）の作と考えられる。二例ともに「念奴嬌」以後の作なので、あるいはその影響と見るべきかも知れない。李秬については未詳。晁補之には他に「次韻信守李秬二首」など十首餘りの詩がある。
- (14) 劉宰の「回江淮大使趙端明」（『漫塘集』卷九）に、「漢晉閒人、羽扇綸巾、輕裘緩帶、以却敵（漢晉の間の人は、羽扇綸巾、輕裘緩帶にて、以て敵を却く）」とあり、この「羽扇綸巾」も當然周瑜を念頭にに入れてゐると見てよいだろう。
- (15) 前掲の拙稿「羽扇綸巾のひと—周瑜と諸葛亮」を参照。
- (16) 『東坡志林』に見えるが、有名な記事なので、ここで引くことはしない。